修士論文（要旨）
2009 年 1 月

「けれども」の多様性について

指導　堀口純子　教授

国際学研究科
言語教育専攻
207J4012
張思維

目次

第1章　研究の動機と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第２章　先行研究とその問題点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
２．１　「けれども」類の変化の過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
２．２　現代「けれども」類の研究状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
2.2.1　文法論における「けれども」類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
2.2.2　認知言語学論における「けれども」類・・・・・・・・・・・・・・・・　3
2.2.3　コミュニケーション論、言語心理、語用論における「けれども」類・　5
2.2.3.1　「けれども」類による言いさし　・・・・・・・・・・・・・・・・　5
2.2.3.2　文末表現としての「けれども」類の機能・・・・・・・・・・・・　6
２．３　先行研究の問題点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

第３章　調査方法とデータについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
３．１　調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
３．２　会話例の表記方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
３．３　データについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
3.3.1　メディア資料について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
3.3.2　データ内容の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10

第４章　分析と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
４．１　「けれども」類の多様な形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
4.1.1　「けれども」類の原型・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
4.1.2　「けれども」類のほかの形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
4.1.3　「ん」と「けれども」類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
4.1.4　「けれども」類と「ね、さ、なあ」の関係・・・・・・・・・・・・・・　23
４．２　「けれども」表現・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24
4.2.1　本稿で使用する用語について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　25
4.2.2　「けれども」表現の分析と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　27
4.2.2.1　文頭の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　27
4.2.2.2　文中の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28
4.2.2.3　文末の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37

第５章　まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　42

脚注・参考文献
資料

第1章　研究の動機と目的

会話では「ですけれども」「ですけれど」「だけど」といった言葉をよく耳にする。その中の「けれども」「けれど」「けども」「けど」などの接続助詞あるいは接続詞（品詞論）は同じ言葉だろうか。日本人母語話者の会話の中に「けれども」などはどのような場面でどのような形式で存在し、どのような機能と意味を持っているのだろうか、といった点に非常に興味を持ち、探ってみたいと考える。

稿者は「けれども」類の言語形式、位置にまず視点をおいて、さらに発話者の心理的意識、「けれども」
表現の機能と意味を通して、「けれども」表現を総体的解釈することを目的とする。

第2章　先行研究とその問題点

先行研究では「けれども」類の由来及び発展過程、現代の各分野における「けれども」の研究実態を読み上げた。その結果、「けれども」類の中の「けど」は最新の語形であることが明らかになった。一方、現代の「けれども」表現については文法論、コミュニケーション論、語用論、認知論、言語心理論などで研究された。しかし、各分野間の関連性はどれでも述べられておらず、「けれども」表現の全体像はまだ明らかになっていない。

第3章　調査方法とデータ概要

本稿では政治討論番組、バラエティ番組、映画といったメディア資料を文字化し、分析、考察のデータとする。選択した番組の発話者の年齢は10代から40代までの人である。場面も主に二つに分けて、改まった場面とお笑いのトーク場面であった。

第4章　分析と考察

まずは「けれども」類の言語形式から分析した。「けれども」類は「けれど」「けど」「けれども」といった原型がある。そして「だけど」「ですけれども」「けどね」「けどなあ」というような形もある。発話者は場面、相手との上下、親疎関係を意識しながら「けれども」の言語形式を選び発言する。

次に聞き手は発話者が言った「けれども」の言語形式と発話者の表情から発話者の伝えたい意味を推測する。また、聞き手は発話者になり、意見や感想を言う。「けれども」表現の多様な形は発話者に十分の選択肢を与えた。発話者は「けれども」表現を文頭、文中、文末に置くことによって、自分の意思を明示的、暗示的に聞き手に伝えることができる。さらに「けれども」類は副詞、形容詞、常用動詞と共起し、聞き手に十分の配慮意識を表す。

第5章　まとめと今後の課題

「けれども」類を出現位置で分けて考察した結果、各位置の「けれども」類の意味と機能の重なりがあることを明らかにした。発話者は「けれども」類の位置を決めることができ、発話中に「けれども」類が文中から、文末になって、発話を中止することもあり、話を続けたいなら文末の「けれども」類を文中に変えることもできる。その結果、先行研究で挙げた「けれども」についての解釈は本当の一部であることがわかった。今後は多くの自然会話を集め、メディアの場合と比べてみたいと考えている。さらに「けれども」表現を使う発話者の心理的意識はどのような解釈の言葉でまとめるのかを今後の課題としたい。

参考文献

内田安伊子(2001)「「けど」で終わる文についての一考察　ー談話機能の視点からー」

岡本真一郎(1998)「聞き手への配慮と言語表現」『日本語学論説資料第1分冊』pp.23-36

尾谷昌則 (2003)「主体化に関する-考察:接続詞「けど」の場合」『日本認知言語学会文集』3 号 pp.85-95

荻原稚佳子(2008)『言いさし発話の解釈理論―「会話目的達成スキーマ」による展開』春風社

金城克哉(2001)「文末表現としての「けれども」の機能について」『言語文化紀要』10 号

熊取谷哲夫・村上恵(1995)「談話トピックの結束性と展開構造表現研究」三省堂 pp.87-112

小柳和喜雄(2005)「メディア・ディスコースの分析方法に関する予備の研究―Norman Fairclough のクリティカル・ディスコース分析を中心に―」奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第 14 号 pp.83-91

坂口至(1990)「近世上方語における接続助詞ケレドモの発達」『日本語学論説資料第3分冊、文法』27号pp.192-195

佐藤勢紀子(1993)「言いさし・・・が／けどの機能:ビデオ教材の分析を通して」東北大学留学生センター紀要,1,pp.39-48

佐久間まゆみ(1992)「接続表現の省略と用法」『日本語学論説資料第3分冊、文法』29号

城田俊(1998)『日本語形態論』ひつじ書房

中野洋子(1980)「接続助詞「けれども」の成立」『成蹊国文』14 号 1980 年 12 月 pp.53-60

仲真紀子(1988)「接続詞「だけど」の使用に見られる推論枠組みの利用とその発達」Japanese Journal of Educational Psychology,1988,36,pp.220-228

永田良太(2001)「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学第 3 巻』第 2 号 pp.17-26

成田麻衣子(2004)「現代語における文末表現の分析-'けど'で終わる文を中心に-」『日本語学論説資料第1分冊、国語学一般、国語史、方言 CD-ROM 版、第 4 分冊』41 号 pp.83-89

西田絢子 (1978)「「けれども」考―その発生から確立まで―」『東京成徳短期大学紀要』11

野田春菜(1997)『「の(だ)の機能』くろしお出版

宮内佐夜香(2007)「江戸語・明治期東京語における接続助詞ケレド類の特徴と変化―ガと対比して―」『日本語の研究』第3巻4号 pp.1-15

宮崎里司・J.V.ネウストプニー共編(2002)『言語研究の方法』くろしお出版

宮島達夫・仁田義雄(1995)『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』くろしお出版

メイナード・K・泉子(2004)『談話言語学』くろしお出版 pp.17-27

メイナード・K・泉子(2005)『「日本語教育の現場で使える」―談話表現ハンドブック』くろしお出版 pp.374-375

山根一郎(2003) 「会話における含意の論理・心理学的抽出モデル」『椙山女学園大学研究論集』第 34 号

宇佐美まゆみ 「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for JapaneseBTSJ) 2007 年 3 月 31 日」http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm 2008 年 3 月 15 日

参考WEBサイト: 「恋のから騒ぎ」 http://www.ntv.co.jp/koikara/

エスノメソドロジー・会話分析研究会 http://emca.jp/